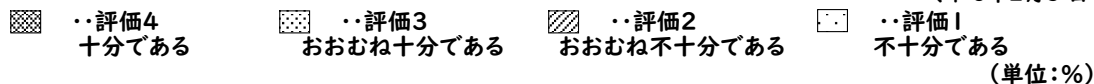
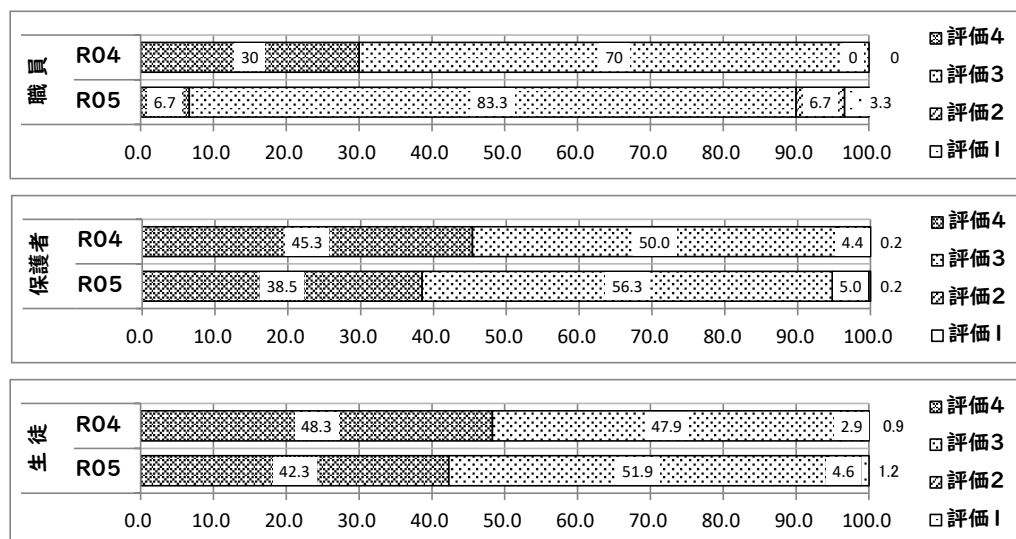


令和6年2月5日

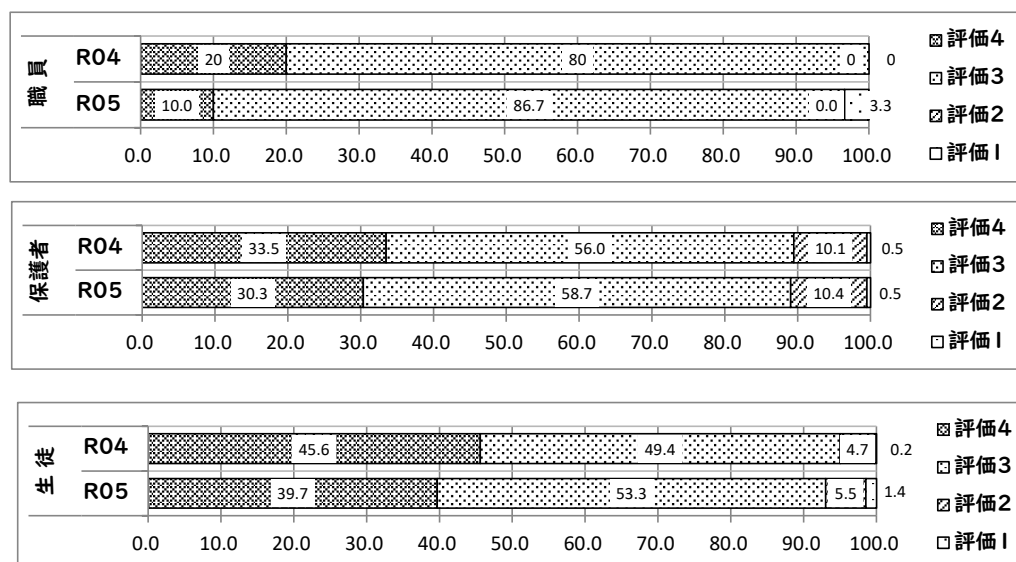


①学校の教育活動は全体的に見て満足できる状態にある。

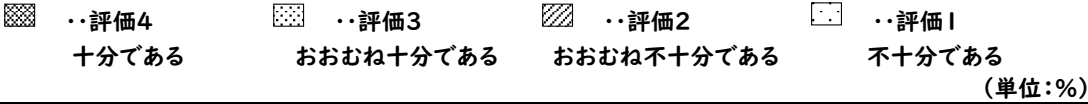


本年度はコロナウイルス感染症が第5類となり、学校教育活動もコロナ禍以前の制限のない状態で進めることができた。体育祭や文化祭等の学校行事も多く保護者の方に来校していただき、直に生徒の様子や、学校の様子を見ていただく機会が増えたことで「おおむね十分である」がほぼ95ptにせまる評価につながったと考えられる。その中で「十分である」が保護者、生徒とも数pt下がっている点については、今まで取り組んできた教育活動がより効果的なものになるよう、見直していく必要がある。また、保護者、生徒ともに「おおむね不十分」「不十分」の評価が前年度より数pt、増加している。この点については依然として学校教育活動の様子や意図が十分に伝わっていない可能性があり、引き続き学校との情報共有やつながりを強くしていく必要がある。

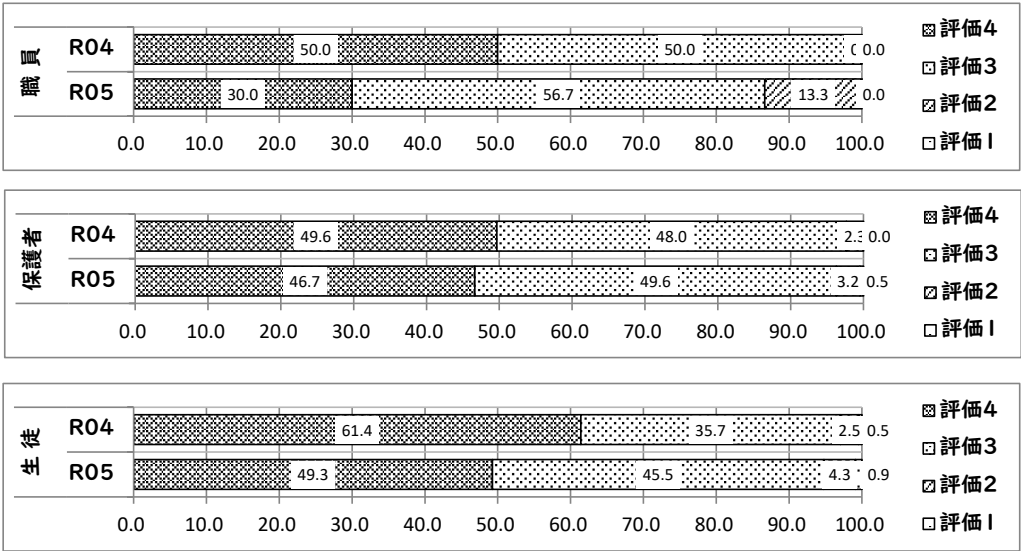
②学校は、生徒に授業をていねいに分かりやすく教えている。→今年度から文言を変更しました。。



生徒は、「十分」「おおむね十分」が93ptとなりほぼ前年度と同様の結果である。本年度は「言語活動の充実」に力を入れ、日頃から生徒たちの対話を重視した授業を各教科で展開した成果があらわれている。また保護者においてもほぼ前年度並みとなる89ptが「十分である」「おおむね十分である」となっていることから、本校の授業で大切にしている「学力観」や「授業観」が十分に伝わっていると評価できる。一方で生徒では「十分でない」が1.4ptいることから、授業内容を十分に理解できていない生徒にもより目をむける必要がある。また職員も「十分でない」が3.3ptとなっており、「十分である」が前年度より10ptも減っている。これは職員が自己の授業に対して厳しく見ている、またはもっと良い授業がしたいという思いの表れだと判断できる。それは今後の授業改善の原動力になっていくものと考ええる。

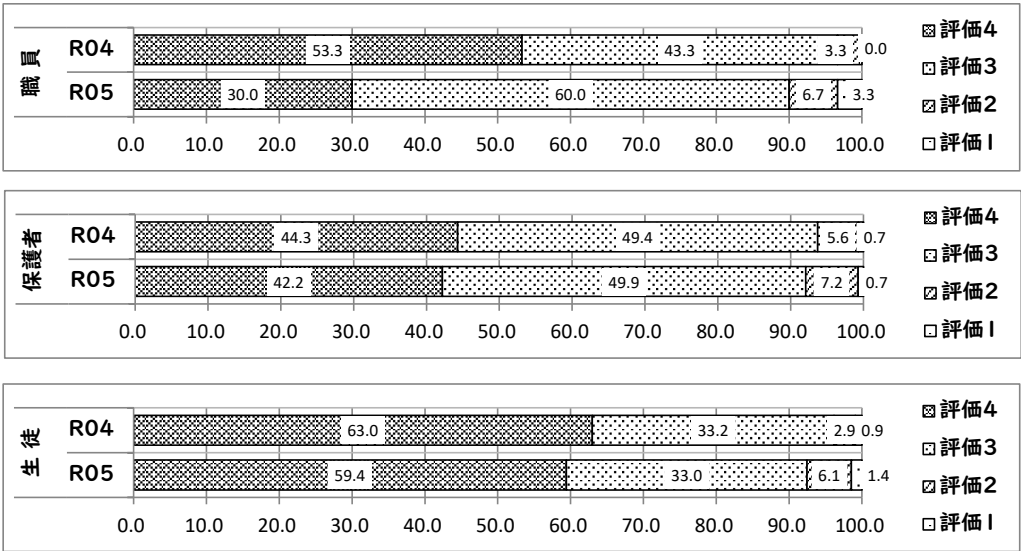


③学校は、生徒会活動や委員会活動を通し、主体的に取り組む生徒づくりに努めている。

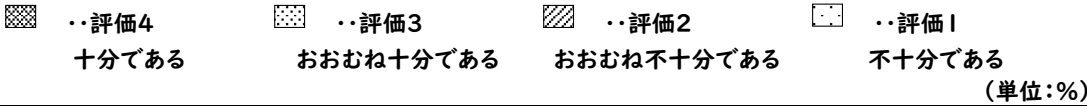


保護者、生徒ともに「十分である」「おおむね十分である」が90pを超えている。体育祭や文化祭では生徒会が中心となって運営の中心を担っている。特に体育祭の生徒会ダンスは今年度で6回目を迎え、内部中学校の伝統的な活動になりつつある。また、諸行事において生徒に役割や責任をもたせ運営したり、あいさつ運動、校内の石けん補充、校内美化や安全点検などの委員会活動を日常から充実させたりする中で、自分たちが学校生活をつくっているという手ごたえを感じている生徒が多いゆえの評価であったと考える。一方で職員では「おおむね十分でない」が13ptとなっている。これは近年、総労働時間縮減が掲げられる中で生徒の自主的な活動を指導する時間を確保しづらくなっていることが考えられる。そのような中で、行事や活動の精選を進めつつ、生徒が自主的に活動できる場をいかに確保していくかが重要である。

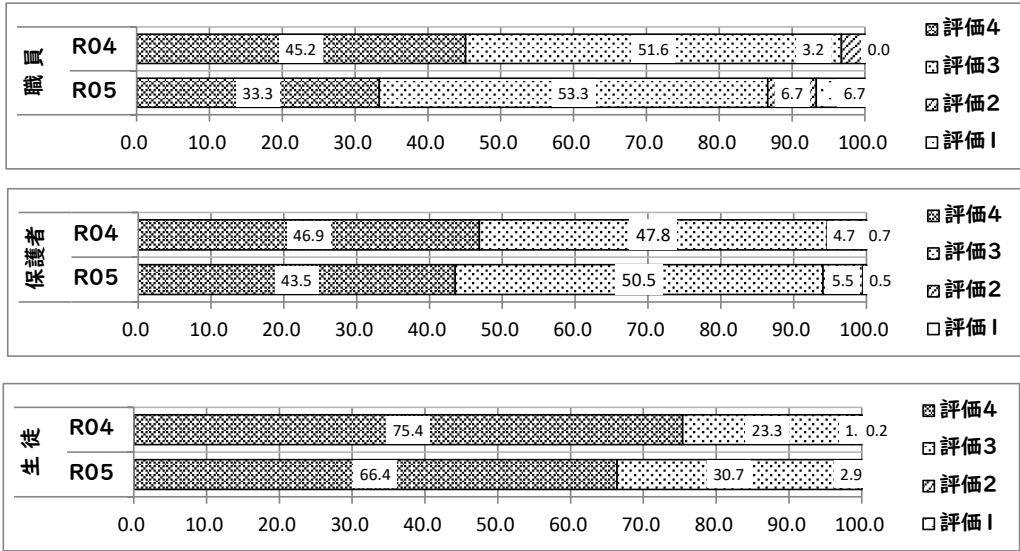
④学校は、いじめや暴力のない学校づくりに取り組んでいる。



生徒、保護者、職員ともに「十分である」「おおむね十分である」が90ptを超えている。これは日頃から道徳の時間や人権教育にしっかりと取り組んでいること、また生徒や保護者との対話を通じて、いじめや暴力をゆるさない学校づくりに取り組んでいることの成果であると考え。一方で、保護者、生徒、職員とも「おおむね十分でない」「十分でない」が増えていることから、より一人ひとりの生徒に向き合い、心を通わせることについて努力をしていかなければならないと考える。また、いじめや暴力については担任等、教師が一人だけで対応したり、抱え込む状況をなくし、複数での対応、養護教諭やスクールカウンセラー等との連携と通じて、いじめや暴力の早期発見、対応に取り組んでいく必要がある。

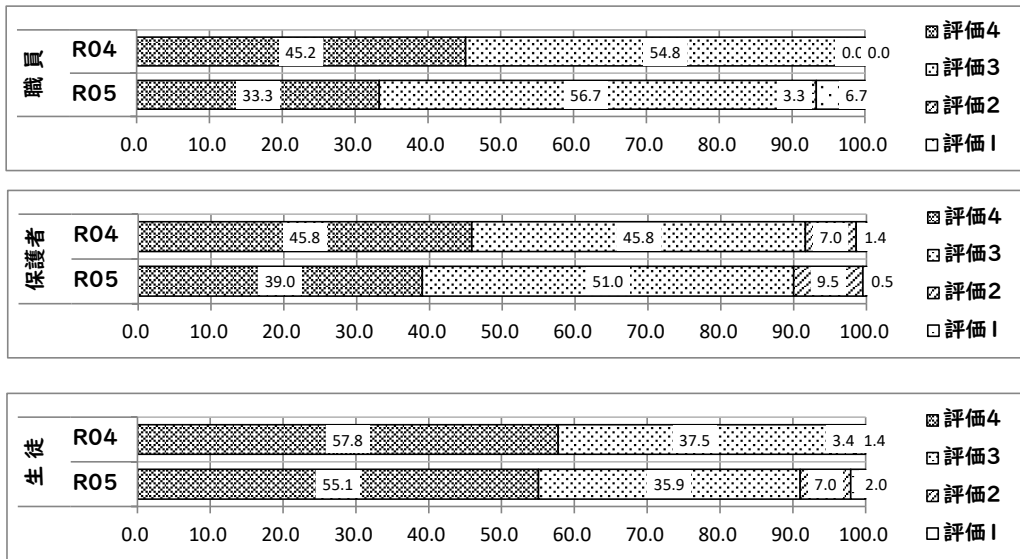


⑤学校は、豊かな心を持ち、命の大切さや人権を大切にする生徒を育てようとしている。



保護者、生徒とも「十分である」「おおむね十分である」が90ptを超えている。いじめや暴力のなを許さない学校づくりとあわせて、安全で安心な学校づくりが進められていることへの評価だと考える。しかし、職員については前年度と比べ「十分である」「おおむね十分である」が大幅に減少している。これは日頃の教育活動の中で、「豊かな心」や「命や人権の大切さ」について生徒と教職員の見方のずれが生じている可能性がある。したがって、特別の教科道徳や人権学習はもとより、あらゆる教育活動の場において、より教職員と生徒が対話し、ともに考えることを通じてこのようなずれは解消されていくと考える。また、引き続き、特別の教科道徳の授業や人権学習を組織的、計画的に進め、命や人権を大切にできる生徒の育成に努めていく。

⑥学校は、生徒一人ひとりが、楽しい学校生活を送れるように努めている。

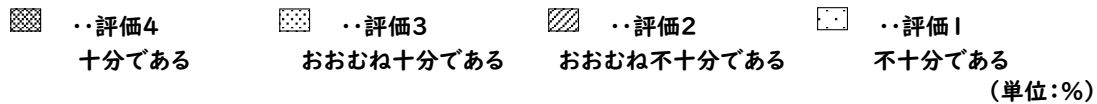


保護者、生徒とも「十分である」「おおむね十分である」が90ptを超えている。しかし、生徒、保護者、職員ともに「不十分である」「おおむね不十分である」が前年度より増加している。このことから学校生活に充実感や満足感が得られていない生徒や保護者の思いをしっかりと受け止め、生活ノートや教育相談などを通じて一人ひとりの生徒の思いを受け止める場面を一層大切にしていきたい。また、担任や部活動顧問等、これまでは担当教職員のみで対応してきた事柄も、担当以外の教職員や養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーが情報を共有し、早めに解決にあたっていくことが重要だと考える。そのような意味で、悩みや問題については、保護者、生徒、教職員とも一人で抱え込まず多様なチャンネルで解決するとい

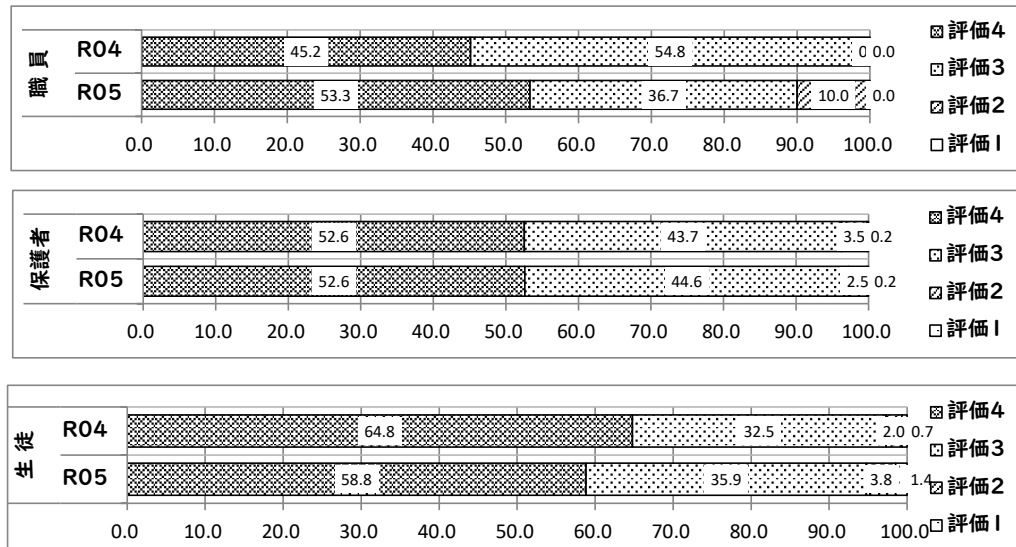
令和5年度 学校自己評価 集計結果及び考察

四日市市立内部中学校

令和6年2月5日

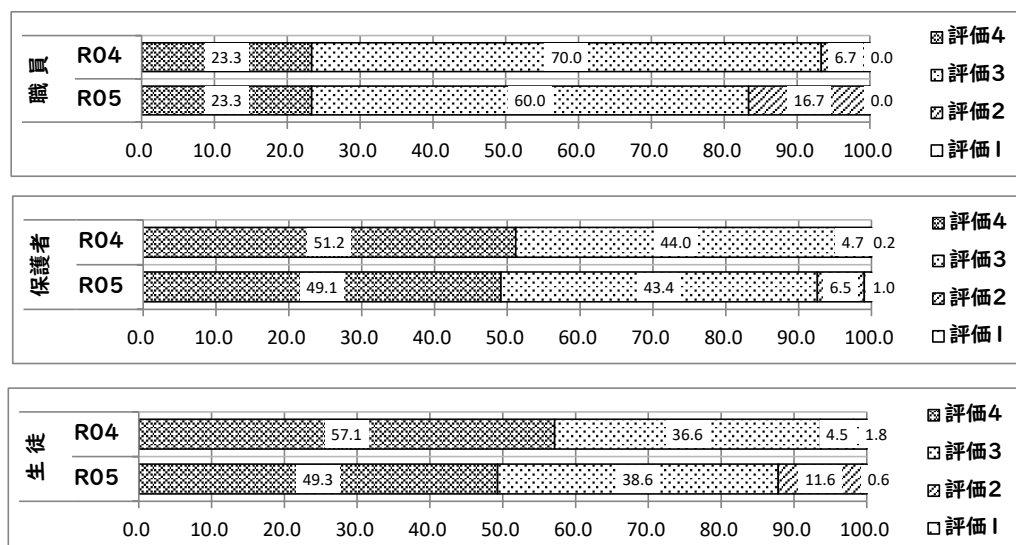


⑦学校は、生徒が健康で安全な生活を送れるような学校環境づくりに努めている。



保護者、生徒とも90ptを超えている。しかし、校舎の老朽化について十分に対応できていないことや、特に今年度は猛暑日が続き、熱中症による生徒の体調不良者が多数出たことも課題である。校舎の老朽化については市教育委員会とともに協議しながら優先順位を決め、校舎の修繕に取り組んでいきたい。また日頃からの教職員、生徒による校舎内の安全について目視点検を強化していきたい。熱中症対策については「暑さ指数(WBGT)」の基準を厳守し、教育活動を行うことはもちろん、熱中症の症状が出たら保護者に迅速に迎えにきていただく等の対策を徹底していきたい。近年、猛暑傾向は強まっており、今後もその傾向は続くと思われる。熱中症にならない身体づくりや熱中症になった時の対応について、学校と家庭が協力して取り組んでいきたい。

⑧学校は、「朝の読書」や「補充学習」等で充実した時間を過ごさせている。

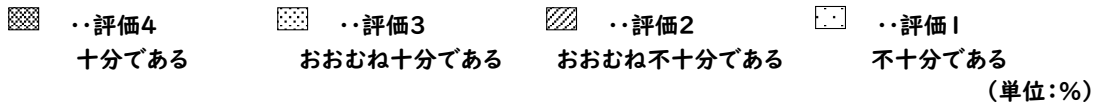


教職員、生徒ともに「やや不十分である」が大幅に増えている。昨年度から全学年で生徒の自主性を尊重した「マイスタ」である多くの生徒が自分の取り組むべき学習内容を見いだせている一方で、自分の取り組むべき課題が分からずに時間を過ごしてしまっている生徒いると考えられる。マイスタの取組も2年目であるが、全クラスでその理念が定着できていない面があり、この点については生徒一人ひとりにとってどのような学びの場になっていくか、再検討が必要である。朝の読書については今年度から市立図書館の電子書籍を各自のタブレットで読めるようになり、より多くのジャンルの書籍が読める等、読書活動の充実が期待される。朝を静かな環境でスタートできるよう今後もしっかりと取り組んでいきたい。

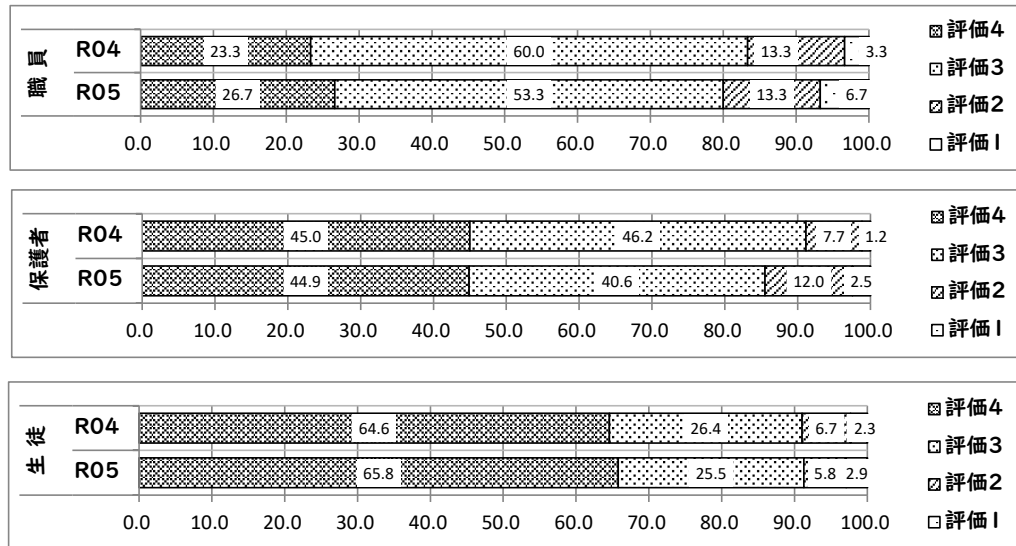
令和5年度 学校自己評価 集計結果及び考察

四日市市立内部中学校

令和6年2月5日

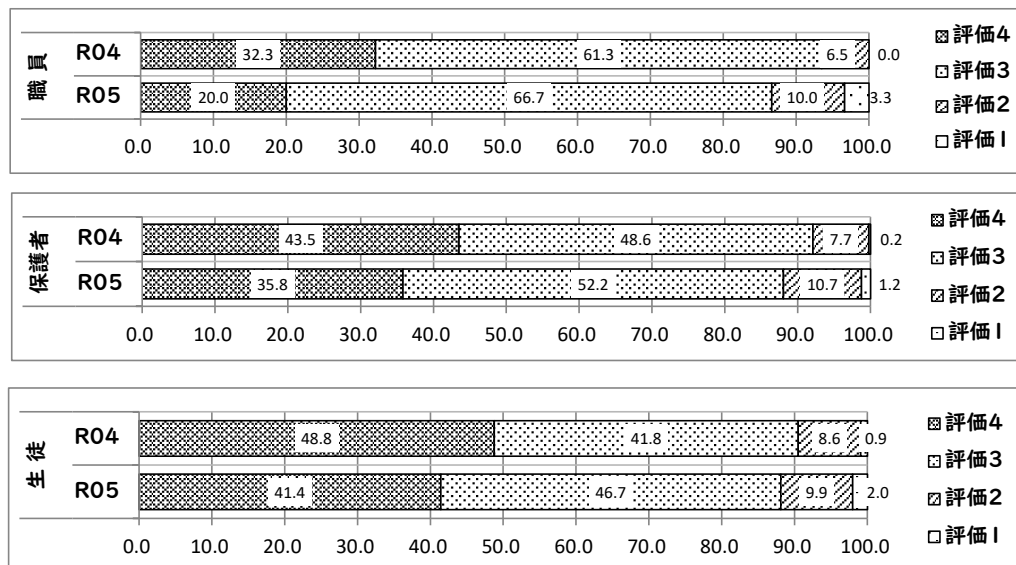


⑨学校は、部活動で適切な指導を行い、楽しいクラブづくりに努めている。



生徒では「十分である」「おおむね十分である」が90ptを、保護者も85ptを超えている。これは部活動の大会や試合、練習がコロナ禍以前と同様の状況となり、生徒も十分に活動できる状況になってきたことで、満足感が得られている結果であると考えられる。一方、教職員では「十分である」「やや十分でない」が80ptと保護者や生徒よりもやや低くなっている。これは、前年度同様、練習時間が十分に確保できていない、多くの部において顧問の複数配置ができず業務上の負担となっている等が考えられる。来年度からは市内では部活動の任意加入制となり、本校では部活動の地域移行が進められる中で、従来からの部活動も含め生徒の放課後や学校外でのよりよい過ごし方を学校、家庭、生徒本人がしっかりと考えていく必要がある。

⑩学校は、将来に向けて夢や志を持つことの大切さや、自らの生き方(進路)を考えさせている。



保護者、生徒、教職員とともに「十分である」「おおむね十分である」の割合が下がっている。しかし、保護者、生徒、教職員とも85pt以上を維持できているのは、「志講演」や「職場体験」等キャリア教育に関する体験的な活動を継続して実施していることの結果であると考えられる。来年度においても、「志講演」等の本校独自の取組は是非継続していきたい。また、生徒が「夢や志」をもつには体験的な活動の取り組みだけではなく、普段の生活そのものをキャリア教育の視点で捉えていくことも重要である。そのためには、「現在の学びがどのように将来につながっているか」等を普段の授業で少しでも生徒に感じさせることや、身近な大人や地域がロールモデルとなっていくことが欠かせないと思う。